

関東農政局長賞受賞

立地を生かした新鮮な地元農産物の直売活動を核とした元気なむらづくり
うえのはらし しんせんやさいせいさんしゃ かいだんごうざかサ-ビスエリア むら ぶかい
受賞者 上野原市新鮮野菜生産者の会談合坂 S A「やさい村」部会
やま なし けん うえ の はら し
(山梨県上野原市)

■ 地域の沿革と概要

上野原市は、平成 17 年 2 月に北都留郡上野原町、南都留郡秋山村の 2 町村が合併して誕生した市で、山梨県の最東部、首都圏中心部から約 60 から 70 キロメートル圏に位置し、東は神奈川県相模原市、南は道志村、西は大月市、都留市と小菅村、北は東京都西多摩郡に接している。

地形は、桂川（相模川）、鶴川、仲間川、秋山川によって形成された河岸段丘とそれを取りまく山地からなり、平坦地は少なく、農地の大部分は傾斜地で、市の総面積の 84%が山林である。

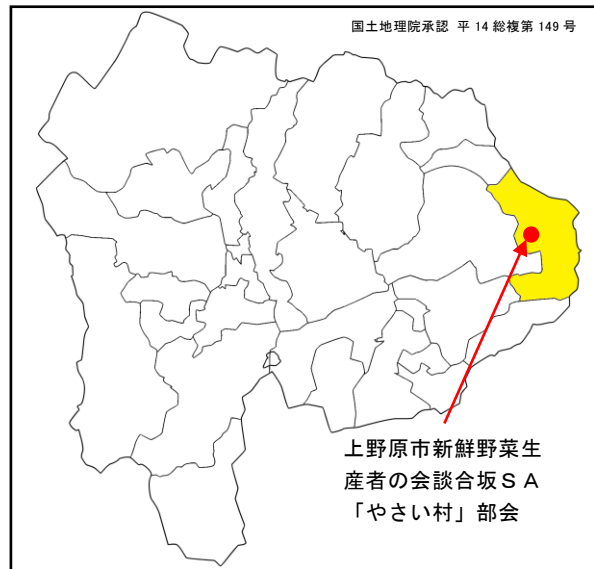
古くは、養蚕や織物業が盛んであったが、近年は、東京のベッドタウンとして、J R 四方津駅北の住宅団地コモアしおつが造成されるとともに、上野原工業団地とリサーチ&テクノパークの 2 つの大規模工業団地に多くの工場が入居するなど、宅地化、工業化が進んでいる。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

上野原市には、中央自動車道、国道 20 号、J R 中央本線が東西に横断し、上野原駅、四方津駅、上野原インターがあり、首都東京を中心とする関東圏から山梨県への東玄関

第 1 図 位置図



注：白地図 KenMap の地図画像を編集

第 1 表 地区の概要

事項	内容
地区の規模	新市町村単位の集団等
地区の性格	機能的な集団等
農家率 (内訳)	10.2% 総世帯数 9,632戸 総農家数 979戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家 29戸 1種兼業農家 6戸 2種兼業農家 52戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 17,065ha 耕地面積 279ha 田 66ha 畑 213ha 耕地率 1.6% 農家一戸当たり耕地面積 0.3ha

として重要な交流拠点となっている。気候は内陸的で、夏冬の寒暖差、昼夜の温度差が大きく、年平均気温 13℃前後、また降雨量は年間降水量 1,400～1,600mm と全国平均に比べやや少なめで、比較的日照時間が長いのが特徴である。

農地の大部分は傾斜地で、古くは、養蚕が展開されていたが、織物業の衰退とともに養蚕業も衰退してしまった。近年は、農山村の過疎化や高齢化、後継者不足等により遊休農地が増加している中、直売所向けを中心とした水稲、野菜、雑穀等の生産が行われている。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア むらづくりを推進するに至った動機、背景

上野原市は、中山間地域が多く、水稲をはじめ、トマト・キュウリ・ナスなどの野菜全般、キク・葉ボタンなどの花き栽培など、複合経営による多品目少量生産で、兼業農家の多くは、母、祖父、祖母のいわゆる「3ちゃん農業」が行われていた。

地域で生産された農産物は、品目は多くても少量のため、市場出荷は少なく、将来的な地域農業の活性化のための「販売」をどうしていったらよいかという大きな課題があった。

そこで、地域の農業者達が少量でも販売でき、新鮮な農産物を提供したい思いから、「直売」に取り組めないかと話し合いがもたれ、昭和 50 年代から「朝市」による地元住民への農産物販売を行い、地域農業の振興につなげようとしていった。

しかし、週一回程度の開催で、お客も固定化するなど、直売には限界があり、売り上げを拡大し地域農業をより発展させるには、新たな販路を確保することが必要であった。平成 10 年頃から、中央自動車道の 6 車線化に伴う用地交渉が行われ始め、従来から首都圏の消費者の多くが利用する談合坂 S A が、中央自動車道が 6 車線化により今まで以上に利用者が増え、そこで農産物の販売ができれば、より多くの消費者に地域の新鮮な野菜を届けることができ、地域農業の一層の振興につながるという談合坂 S A を活用した直売への取り組みを考え始めた。

そうした地域の思いを「犬目宿直売所」と「上野原こだわり農産物生産者の会」の 2 つの生産者組織のメンバーが中心となり、談合坂 S A を管轄する日本道路公団（当時、民営化後は中日本高速道路(株)）と折衝を重ねていた。この頃、J A S 法による農産物の原産地表示義務や雪

印の牛肉偽装問題など、消費者の食の安心・安全に対する意識も高まりつつあり、日本道路公団も地元の新鮮な農産物を販売することは高速道路利用者への付加価値となると認識し、平成15年10月から談合坂SAにおける直売が試行的に実施されることとなった。平成15年度に3回、平成16年度に8回開催したところ、いずれも農産物はほぼ完売となる大盛況で、談合坂SAでの直売は、地域の活性化の取り組みとしても大きく期待できるものとなった。

イ むらづくりについての合意形成の過程とその内容

東京のベッドダウンとして、東京・横浜方面に通勤、通学する県外からの新しい住民が増え、地域においては、生産者の減少や高齢化などに伴い、これからの地域の農業について不安を抱いていた農業者達が会合を持ち、地域の農業を守っていくためにはどうしていったらよいかなど話し合いがもたれた。

会合を重ねる中で、生産品目の種類は多くても生産量が少ないため、今後も活力のある地域農業を構築するためには、朝市以外の談合坂SA内での直売を常設化することで、地域農業の振興を図っていくことが必要であるという結論となった。そうした中で、地域の農業者とその組織、上野原市（当時上野原町）、農協、県関係機関が一体となり、組織体制等について検討を重ね、より多くの農業者が談合坂SAの直売へ参加し、上野原市の農業が活性化するよう、最終的には市内生産者グループ14団体が結束した「上野原市新鮮野菜生産者の会」を、平成17年1月24日に立ち上げた。

その後、日本道路公団が平成17年10月に民営化(中日本高速道路(株))され、中央自動車道のSAを管理することとなった中日本エクシス(株)と「上野原市新鮮野菜生産者の会」でSA直売所常設化のために検討を重ねる中で、中日本エクシス(株)から、出荷体制や品質管理の面等から一層確立された組織体制が求められ、「上野原市新鮮野菜生産者の会」の中に、談合坂SAの直売専門の部会となる「談合坂SA『やさしい村』部会」(当時55名で発



写真1 SA内にオープンした「やさしい村」

足)を平成18年6月19日に発足させた。これにより、平成18年7月1日に念願の常設直売所としてSA内に「やさい村」がオープンし、本格的に直売所活動を開始した。

ウ 現在に至るまでの経過等

「やさい村」のオープン以降、売り場面積の拡張、営業時間の延長に取り組むとともに、出荷農家の確保、農家による出荷品目を増やす努力や、県単独補助事業を活用したビニールハウスの整備による、冬場の野菜を確保する取り組みによって、品揃えを充実させ売上げを伸ばしてきた。その結果、「やさい村」部会の会員は年々増加し、設立当時の55名から現在では178名となった。

会員の年齢構成は、70才代以上の高齢者が多いが、定年退職後に野菜栽培を始めるなど、60才代も増えてきており、直売所があるおかげで、農家の収入が伸びるとともに、高齢者や定年退職者の生きがいにもつながっている。

「談合坂SA『やさい村』部会」のモットーは、「新鮮(美味しい)で安全なものを安く提供する」であり、新鮮を期すため、農産物は販売当日の「朝採り」を基本としている。中身が見える形態での販売や、切り花は出荷から2日間の販売と決めているなど、消費者に一層の新鮮さをアピールしている。また、安心・安全な農産物として、有機栽培又は減農薬・減化学肥料による栽培に取り組み、生産履歴日誌を記録し、消費者からの照会には必ず応じることにしている。

このように、新鮮(美味しい)、安全で安いという購買者の期待に応えることを信条として、会員一丸となって取り組んでいる。

「談合坂SAやさい村」での売上金額は、平成19年度の約8,300万円から、平成26年度には約1億5,700万円と約2倍近くに伸びており、購買者数も近年は25~26万人と増加している。



写真2 店内には季節の旬の野菜が並ぶ



写真3 平日でも賑わう店内

山梨県が平成16年度から実施している地産地消の優れた取り組みに対する表彰において、平成22年度に、地元産農産物の販売の活発な活動が認められ、地産地消優良事例の知事表彰を受賞した。この「談合坂SA『やさしい村』部会」の取り組みは、山梨県が平成27年度から交流人口を増やすことを目的に、観光客ら来県者による農産物等の購入拡大を促す「地産訪消」の先取りをしたものである。

(2) むらづくりの推進体制

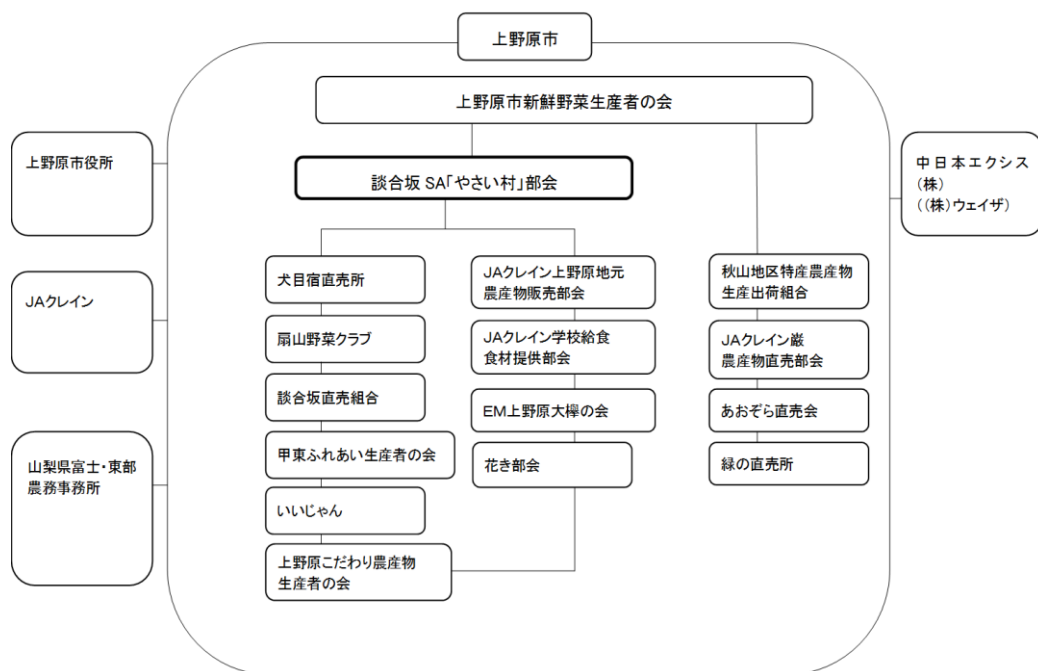
ア 当該集団等の組織体制、構成員の状況

「談合坂SA『やさしい村』部会」は、部会長を筆頭に、副部会長3名、一般の会員で構成されており、地域の10の生産者グループ会員から組織されている。

具体的には、犬目宿直売所、扇山野菜クラブ、談合坂直売組合、甲東ふれあい生産者の会、いいじゃん、上野原こだわり農産物生産者の会、JAクレイン上野原地元農産物販売部会、JAクレイン学校給食食材提供部会、EM上野原大樺の会、花き部会の10グループである。

また、構成する生産者グループからの代表1～2名による運営委員会を設け、出荷に関する必要な事項を定めるとともに、定期的に出荷物の検査等を行っている。

第2図 むらづくり推進体制図



イ 当該集団等と連携してむらづくりを行う他の組織、団体及び行政との関係

「談合坂S A『やさい村』部会」は、「やさい村」における直売活動が主であるが、上野原市をはじめ、山梨県富士・東部農務事務所、J Aクレイン等と連携し、農産物の生産技術・販売についての指導・助言により、品質の向上や栽培品目の拡大等の試み、会員の栽培技術のレベルアップに取り組んでいる。また、市及び県外からの新住民が増えている中、新旧住民との交流、地域を知ってもらう目的で、毎年11月に上野原市が主催する「上野原市農林業祭り」の中心的メンバーとして参画・出展し、新鮮な地元の野菜等を販売し、上野原市の農産物や農業の良さをPRしている。



写真4 上野原市農林業まつりの様子

ウ むらづくりに関して、各集落の住民の当該集団等や連携する他の組織、団体との関係及び参加状況等

組合員は55名から年々増え続け、現在では3倍を超える178名となっており、「やさい村」での売上げが伸びていくに従い、会員の生産、販売の意欲は段々と高まり、一層品質が良く魅力のある農産物の提供を通じた様々な取り組みへ発展していくことが期待できる。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

「談合坂S A『やさい村』部会」は、直売に特化した中で、地域農業の要になっているとともに、農業の担い手の確保、耕作放棄地の解消、新たな特産品づくりなど、地域の活性化、むらづくりに大きく貢献している。また、少量で多品目の生産という地域農業の弱みを強みに変え、談合坂S Aでの「農産物直売」を核とした活動により、地域農業の活性化、むらづくりを推進している。

2. 農業生産面における特徴

(1) 当該集団等の農林漁業生産、流通面の取組状況

「談合坂S A『やさい村』部会」では、安心・安全の消費者志向に応えるため、農薬、化学肥料はできるだけ減らす方針で取り組んでおり、部会員のエコファーマーは14名で、市全体（34名）の約4割を占めている。今後も、エコファーマーの増加に努め、積極的に環境にやさしい農業に取り組んでいくこととしている。

さらに、安心・安全な農産物の栽培技術の一層の向上を図るため、定期的に会員への研修として、農薬の適正使用、有機栽培、GAP（農業生産工程管理）などに関する講習や、地域活性化の先進地事例等を学ぶための先進地視察を年1回行っている。

このような取り組みにより、予想を上回る評判となり、現在では年間約130品目の農産物、販売品目では約240種類と豊富な品揃えで販売できるようになった。

(2) 当該集団等による生産力の向上、生産の組織化、生産・流通基盤の整備等への寄与状況

各部会員は、S A利用者に年間を通して地元産の新鮮な農産物を届けることを使命感としており、その使命を果たそうと日々努力している。そのような中、平成19年度及び24年度には、県単独補助事業を活用してビニールパイプハウスを計31棟設置することにより、露地野菜の育苗や、トマト、キュウリ、ピーマンなどのハウス栽培に取り組み、生産品目の拡大や冬期に販売する野菜の生産体制強化に取り組んでいる。



写真5 補助事業を活用して整備したビニールパイプハウス

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 当該集団等による生活条件の改善・整備、コミュニティ活動の強化、都市住民との交流等

「談合坂S A『やさい村』部会」は、毎年11月に開催する上野原市主催の「上野原市農林業祭り」の中心的な団体として参画し、市内外の住民等との交流を積極的に図っている。

また、より多くの高速道路利用者に上野原市産の農産物の良さを知っても

らうため、談合坂S Aの「やさい村」において、秋に「感謝祭」を開催し、S A利用者との交流、地元農産物のPR等を行っている。

さらに、販売する農産物を持ってきた生産者同士があいさつや声を掛け合うことにより、地域のコミュニケーションにもつながっている。



写真6 毎年開催される「感謝祭」の状況